2027年の回想

―いま明かされる事件の全貌―

2年　三浦　洋嗣

あれは、そう50年前のことになるだろうか。私は大学のサイクリング部にいた。私は大学2年で、その年の夏、東北へ合宿に出かけたのだ。――――――――――――――――――――

――「Kさんという方が下で事故を起こしたので助けに来てくれと言っている。」と後から来た車のドライバーに告げられた私は、雨の中をもと来た方へひき返した。――――――――――――――

7月29日夜、上野をたった我々5人（私、N、K、H、T）は30日に自転車で大湊駅を出発し、恐山―大間崎―福浦―青森―八甲田山―十和田湖という道をたどり8月5日、悪天候の中を八幡平頂上をめざしてアスピーテラインを登っていた。

この日、昼ごろどんよりとした空の下、大沼キャンプ場を出発した我々だったが、登り始めるとまもなく雨が降り出し、その雨は一日中断続的に降り続いた。最初から元気を見せるNは先頭をきって先へ先へと進み、やがて2番手の私の視界から消えてしまった。黙々と雨の中をのぼっていく。時おり車が通りすぎる。孤独だ。暗い。つめたい。道ばたの道標の数字が7km、8km、9kmと変わっていく。私のあとからは、T、H、Kが続いているはずだ。

13km、いや、14km地点をすぎたあたりだろうか、雨が一段

と激しくなり、ゴーッという音をたてて降ってきたのは。顔、手、足、露出している部分は容赦なく雨滴をたたきつけられる。痛い。前が見えない。それまでは雨の中「早く登りきってしまおう」と思ってペダルを踏み続けてきたが、さすがにこの雨でくじけて、「止まろうか」という気持ちになった。しかし、雨を避けられる場所はない。登るしかない。するとまもなく展望台が駐車場が少し開けた平地に出た。展望台の端の柵のところまで行ってみるが何も見えない。晴れていればよい景色なのだろうが、残念だ。展望台をあとにして進むと、道が下りになっている。一生懸命ブレーキレバーを握りしめて進んだ。この豪雨のため、視界は3mほど、そしてブレーキもきかない。下りは恐い。雨の音以外何も聞こえない。大声をはりあげて歌を歌い、自分をはげました。雨がさらに強まる。視界がさらに悪くなる。後から来る者が心配になった。「危険だ、みんなを待ってからいこう。」と思い、どこか雨を避けられる場所を、と捜したがあきらめてその場に止まった。自転車から降りて体を伸ばすと腰が痛い。フロントバッグから飴を取り出してなめる。車が何台か通り過ぎた。また一台と見ているとその車は私の脇に止まった。車の人が「おい大丈夫か、あと500mくらいだぞ、がんばれ。」と言ってくれた。私は「はい大丈夫です。」と答えた。こんな時、他に答え方があるだろうか、たとえ大丈夫でなくとも。なかなか仲間がこない。

10分ぐらい待っただろうか。もしかしたら5分程度だったかもしれないが、あの豪雨の中で私は時間感覚を逸していた。時おり通り過ぎる車の中で1台の車が私のかたわらに止まった。「またかな」と思った。ところがそうではなかった。50代ぐらいの夫婦が私にそのしらせをもたらした。「Kさんというのはあなたの仲間ですか。」何かあったか、という気持ち、不安が胸をおおった。「はいそうですが」と私。「そのKさんという方が下で事故を起こしたので助けに来てくれと言っている。」私はびっくりして車の人に礼を言うと自転車の向きを180°変えて来た道をひき返した。事故と聞いて私は「車とぶつかりでもしたのか」と心配し、Kの顔を思い浮べた。さきほど通った展望台を過ぎて道は下っていた。雨は小降りになった。下っていくと、道ばたにTの自転車が横倒しになっているのを見つけた。Tの姿はない。不審に思って、Tの名前を大声で叫んだが応答がない。どうしたんだろうとKのことに加えて私の不安は大きくなったが、まずKのことだと、また下っていくと、誰か人が前を歩いている。「事故現場に人がむかっているのか」と思い不安はますます大きくなった。しかし、近づいていくとそれがTだとわかった。視界が悪いために遠くからはわからなかったのだ。Tも車の人に聞き、自転車を置いて歩いて下ってきたのだという。私はTに先に行くと言って、なおも下っていくと12〜13kmぐらいの地点だろうか、前方に H、そ

してその先にKの無事な姿を見つけたのだ。私はHに「どうしたんだ。」と尋ねると、「Kがチェーンをフリーの内側におとして、くいこんではずれなくなったんだけどもう直った。」と言う。Kに「事故を起こしたなんて聞いたから、車にでもぶつかったのかと思った。」と言ったら、「そう言わないと来てくれないと思った。」と言う。HとKのふたりでチェーンをはずそうとしている間も、私たちが来ないので2年生は薄情だなと思ったという。こちらこそ事故だなどと心配させられて損したという気持ちなのに。まあ、無事でよかったと思い、Kの後からしんがりで登っていった。雨はあがっていたようだ。これで「あ～、よかった、よかった。」と言って登りきれたなら、のちに「アスピーテ事件」として世に有名（？）になることはなかっただろう。それまでのことはアスピーテ事件の第一幕でしかなかったのである。

第二幕がきっておとされたのは、再び登っていた14kmの地点あたりだったろうか。Kが眼鏡がないと言いだしたのだ。雨の中、眼鏡は非常に見づらいのを、眼鏡をかけている方は知っているだろう。Kはあの豪雨の中、眼鏡をはずしてフロントバッグの上において走っていたという。それが今見るとないというのだ。「どこで落としたかわからないのか。」ときくと「チェーンをくいこませて直していた所に置いてきたにちがいない。」と言うので、私は、自分のためにこれ以上遅れるのがすまないと思ってか「もうあき

らめる。」と言いはるKを引っぱって2人で捜しにまた下っていった。眼鏡といえば何万円もするものであるし、これから先ないと不便でもあろう。少しぐらい遅れたってどうということはない。雨もいちおうあがっていて、下りは風を受けて爽快だ。このあとまた登らなくてはならないことを一瞬忘れた。Kがここだという左カーブに着き、カーブの内側を入念に捜したが見つからない。Kは「Mさん、もういいですよ。眼鏡がなくても大丈夫ですから。」と言うが、私はあきらめきれなくて、Kに「先に行っている。俺はもう少し見ていくから。」と言って先に行かせ、ひとりで捜した。10kmか11kmぐらいの地点に使われていない料金所のようなものがある。Kが、眼鏡をなくしたのはそこより上だと言ったので私はその料金所まで下った。そしてそこから自転車でゆっくり登りながら、時には自転車からおりて、地面をそしてU字溝の中をなめるように見ていった。なかなか見つからない。だいぶあきらめ気分になってさしかかった左カーブ（それはKとふたりで捜したカーブのひとつ下の左カーブだった。Kのかんちがいだったのだ）の内側の中ほどにそれはあった。まさしくあった。つるを開いた形で逆さになって、自分の存在を主張するように、それはそこにあった。私は、胸の高鳴りを抑えられずに、喜々としてそれを取り上げるとレンズの無事なことを確かめ、フロントバッグにおさめた。そしておお急ぎで坂を登った。ペダルを踏む足も快調

だ。やがてKに追いつき、「あったぞ」と言うと、「え、本当ですか。」と驚いたようす。私は内心得意だった。そしてその後は何もなく（あったらこまる）頂上のレストハウスにたどりついたのであった。

予定では2時間のつもりが登るのに4時間近くかかった。私はゴール500m手前で無念のUターンをして結局10kmぐらい余計に走り、半分の5kmぐらい余計に登ったことになる。アスピーテを1回半登ったことになる。まあこれも50年たった今ではいい思い出である。その後私は、車でアスピーテラインを訪れたが自転車で登る若い人の姿を見ると懐しかった。

ところで、あの時の仲間は今どうしているだろう。Nは白黒テレビを専門に作る会社を作ったが倒産して、その後どうなったか。Tはレストラン〈MEME〉を経営していたが、失恋レストランもはやらなくなりつぶれたらしい。Kは優秀な成績で大学院へ進んだが、気が狂ってしまい、精神病院に入れられて毎日、「エーマル、エーマル」と叫びながらわけのわからないレポートを書いていたというが。そしてHは、あいつは学生の時、K・F・Cのバイト先の女の子と姿を消して以来50年も消息がない。私はHのことを考えるといまでもあのHの卑猥な踊りが目に浮ぶ。どうしているのだろう。

2027年12月14日　晴れ